



第136号

平成28年3月1日発行
発行所
長崎大学玉園同窓会
〒850-0029
長崎市八百屋町36番地
☎095-824-5494
発行人
山崎滋夫
(株)昭和堂

キャンパスの今昔

―戦後70年の思い出―



玉園同窓会広報部長

大隈 智

家野町の学芸学部のカンパスには、戦後70年の節目の年に当たり、さまざまに思い出すことがあります。

〈原爆被爆のこと〉
私は、生まれも育ちも、現在住んでいる「岩瀬道町」です。現在の三菱造船所の本社ビルの近く、爆心地から3・5キロの地域です。

小学3年の夏休み、B29の爆音を聞きつけ、一人で、近くの防空壕へ行きました。その入口で空を見上げ、機体を捜しました。ほとんど、白い薄雲でしたが、稲佐山の上空に青空

が見え、そこにB29を見つけました。その機体から、白いものが落とされ、ゆっくりと降りてきます。白いパラシュートです。しかも、その下に爆弾の形をしたものが吊られています。怖くなり、壕の中へ歩み込んだ瞬間、辺りは真昼のように明るくなりました。壕を飛び出し空を見上げると、大きな綿菓子のような、白い雲が、空に向かってもくもくと上っていきます。怖さも忘れ、茫然とそれを眺めていました。

11日の早朝、私の祖父と母に連れられて出発しました。稲佐橋を渡り、電車道沿いに、松山、大橋を通り昭和町へとたどるコースです。
爆風で吹きはらわれた白い道、周囲は瓦礫が散乱しています。そんな中を、みんな無言で足早に先を急ぎました。
今の、大学の裏門付近に来たとき、私は尿意をもよおし、元の三菱兵器工場側の崖沿いの溝に行き、用をたそうとしてはっとしました。深い排水溝の底に、国防色の服を着た人が横たわっているのです。驚いてその左右を見ると、離れたところにも見えませんでした。用もたさずに急いでみんなの後を追いました。なぜか、そのことは誰にも言いませんでした。

三ツ山への途上、いつも明るい母が元気がありません。その理由は後でわかりました。実は、母の兄は、兵器工場で魚雷の製造に当たっていた被爆し、重傷を負い、病院に運ばれ、危篤の状態だったのです。そして、数日後、亡くなりました。私をよく可愛がってくれた伯父でした。
三ツ山での生活は、3日で終わり、家に戻るようになりました。空襲もなく、きれいな小川で遊んだりの、楽しい日々でした。
〈その後〉
中学1年になり、私はボーイスカウトに入団しました。その5月頃、奉仕活動に出かけました。学芸学部が、家野町へ移転する頃です。工場跡の瓦礫などを片付ける作業でした。作業している写真が手元にあります。その場所が、今のキャンパスのどの辺りなのかは分かりません。
やがて、学芸学部の学生となりました。キャンパスのあちこちに、かつての兵器工場の痕跡が見られました。用水槽、曲がった鉄骨を付けたままのビルの基礎、さまざまの鉄片、コンクリート片……それらを見るにつけ、この地で被爆し、亡くなった伯父のことを思っていました。
〈そして今〉
玉園同窓会のお手伝いをしているおかげで、ときどきキャンパスを訪れます。学究の府として整備された校地、行き交う、生き生きとした学生たち、かつては、見ることもなかった留学生……。もう一度、学生になってここへ戻れたらなどと思っております。

戦後70年の節目の年、もう、あの頃の痕跡は、キャンパスのどこにも見られません。でも、この場所で、1万を越える人が亡くなったこと、わけても、学徒動員として働いていて亡くなった、多数の先輩がいたことへ、思いを致していただけたらと、この一文を書きました。

主題
**「学校・家庭・地域社会が
 一体となって取り組む教育」**

本同窓会は、「生きる力」の育成を、学校・家庭・地域社会が相互に連携しつつ、社会全体ではぐくんでいくものであり、大人一人ひとりが社会のあらゆる場で取り組んでいくべき課題であると受け止め、標記課題を掲げ、本年度1年間、研修に取り組んでいるところです。

前号では、諫早市立小栗小学校・西海市立東小学校・長崎市立大浦中学校の取り組みを発表していただきました。

3校とも、歴史と伝統にはぐくまれた地域の特性を生かし、地域住民の方々や保護者の皆さんの協力を得て、「地域の学校」として、地域住民の拠り所となり、その連携の力が、児童生徒に「生きる力」を身に付けさせていることをうかがうことができたものと確信しています。

本号におきましても、引き続き、標記主題に取り組む、更に研修を深めていきたいと考えました。

現職会員の皆様には、3校の取り組みを参考に、自校の取り組みを検証し、退職会員の皆様には、校区の学校の取り組みと重ね合わせ、「生きる力」を身に付けた児童生徒の育成に取り組んでいただきたいと思います。

ともに子どもを伸ばす

佐世保市立大久保小学校長 小林 庸 輔



「おはようございます。」

子どもたちの声とともに、地域の方々の声が響く。大久保小学校の毎朝の登校風景である。

どの学校にもある風景かもしれない。しかし、この風景はどこか違う。それは、子どもたちの健やかな成長を願う、地域の方々の熱い思いが感じられるからである。

平成16年6月1日。本校で起きた「同級生殺害事件」
 「私たちの手で、どうにかしなければ。」保護者や地域の方々が、より結束した瞬間だった。

それ以来、本校では11年間、6月

1日に「いのちを見つめる集会」を開き、いのちを大切にすることを決意発表を行っている。多くの保護者・地域の方々が参加する大きな集会である。報道の方々の参会も多い。

「大久保小学校の子どもたちは、こんなに素直ですよ。皆さんのおかげで、これだけたくましく成長していますよ。」という姿をお見せすることが、地域の方々への最高の恩返しと考えている。

毎月の民生委員・児童委員の会
 年3回の町内会長の会

学校と家庭・地域をつなぐこれらの会には、校長として出席する価値が十分にある。そこは、お互いの信頼を深める会である。よいことも悪いことも正直に話し、ともに育てることを認識する場である。

併せて、「放課後子ども教室」のボランティアもすばらしい。毎週木

曜日の放課後に、10名ほどの地域の方々が集まり、理科実験・陶芸教室・音楽鑑賞・ミニ門松作り・折紙教室等、様々な活動をしていただいている。計画から実施までのすべてが、子どもを伸ばしたいという情熱でいっぱいである。

また、図書ボランティアの保護者も積極的である。本の整理から図書室の飾り付け、読み聞かせなど、本校の図書室経営の一端を担っていただいている。

これらの組織が中心となって、子どもたちが日々温かく見守られていると痛感する。

私の役目は、このことを保護者や地域の方々に周知することである。全体に広め、全体の教育力（子どもに関わる力）を伸ばすことである。そのために、学校だよりやホームページへのリアルタイムの紹介や啓発に努めている。

昨年度、教育実習で本校を訪れたのは、事件当時の6年生女児。彼女には、大きな壁を乗り越えたたくましさがあった。これも、これまでの学校・家庭・地域の連携の積み重ね

があったからこそと思う。

子どもたちの毎日のあいさつは、全体を明るくさせる原動力になる。「学校が楽しい」と言える子どもを

育てる。この学校・家庭・地域の三者共通の思いと連携は、永遠に変わることはない。

峠の文化「卯麦の盆踊り」



対馬市立豊玉小学校長 薦田 万州生

港」から、車で約35分北上した所に

「豊玉小学校」は位置する。児童数は95名で年々減少の一途にある。校区は広く、かつては5つの小学校があった。多くの集落があり、区長数は12を数える。昔は、それぞれの集落で独自の文化や風習を持ち、活気ある生活を送っていた。私はそれを「峠の文化」とよんでいる。

「盆踊り」もその一つである。対馬全島の多くの集落で、独自の形態を持ちながら実施されてきた盆踊りも、今ではずいぶん減っている。

豊玉小学校がある「仁位」地区から、西に峠を2つ越えた所に、「卯麦」という集落がある。（現在では、トンネルが2つ開通し峠を越えるこ

とはない。）豊玉小学校では、伝統文化を掘り起こし受け継いでいくために「卯麦の盆踊り」を復活させ、20年間踊り続けている。「卯麦の盆踊り」は、6つの踊りから成るが、本校が踊っているのは、男子が「太刀踊り」と「杖踊り」、女子が「笠踊り」と「扇子踊り」の4つの踊りである。男子は黒い法被姿、女子は白い着物姿で踊る。大変可愛らしい姿である。

毎年、6年生が4月から練習を始め、8月の神社の大祭、11月の豊玉町文化祭、12月の対馬郷土芸能大会等で披露している。

練習は、総合的な学習の時間や夜の時間及び長期休業中に行い、卯麦地区から2人の方が指導に来てくださる。発表会当日及びその前後は、着付けや運搬等で、保護者や地域の方に大変お世話になっている。練習には時間と根気を要し大変であるが、発表後には多くの賞賛と感謝の言葉を受け、子どもたちは充実の表情となる。

地域の文化が薄れ、地域に学校がなくなっていく中で、残った学校の

役割は大きい。今後も、保護者や地域の人々の力を借り、地域に根ざした教育を根幹に据え、学校経営を進めていく所存である。

子どもたちは、変化の激しい予測不能な世の中、グローバルな社会の中を生き抜いていかなければならぬ

い。だからこそ、生まれ育った地域を知り、伝統を大切に、地域の人々に感謝する心を育てることは大切であると考える。

豊玉小学校の子どもたちの可愛い舞は、これからも続く。

学校は地域活性化の要の役割を果たす

南島原市立深江中学校長 城谷和人



「時を守り 場を浄め 礼を正す」をスローガンとし、具体的方策を以下のように設定しました。

- 一 深江中の長所を伸ばし、自信と誇りを持たせる。
- 部活動 ○生徒会活動
- 二 気持ち良く1日をスタートさせ自主性を促す。
- 朝読書 ○ノーチャイム
- 三 「深江の底力」を培う。
- 無言清掃

はじめに
平成25年度新任校長として本校に着任し、学校課題の第一は「生徒指導の立て直しと定着」であると認識しました。スマートフォン等が爆発的に普及し始めた時期でもあり、多種多様な課題を抱えていました。職場や学校再建のキーワードといわれ

学校課題を解決し、信頼される学

校を築くために、家庭・地域との連携を学校経営の柱としました。

現状と課題+取り組みを伝える

問題行動を含め、現状と課題をブライバシーに配慮しながらきちんと伝えます。加えて具体的方策による取り組みの状況と苦慮している現状も伝えます。苦情やお叱りには謙虚な対応と、指導の経過や結果をお礼とともに報告することを心がけています。「雨降って地固まる」の姿勢

なく、スタッフとして活躍させたり、企画に携わることが重要だと考えます。事前会議や前日準備、当日の運営スタッフと後片付けまでやり遂げること、地域から賞賛や励ましのことをいただき、ますます意欲を持ちます。活躍の場を与えてもらい、機会を重ねる度に生徒は育てられ、表情豊かに自信を持って表現できるようになりました。負担と感じ、渋々参加するのは大違いです。

で臨めば、逆に信頼を得ることができると思います。また、マイナス面については誤解がないように直接口頭で伝え、生徒や職員の努力の成果等プラス面は、学校だよりやホームページで大きく伝えるようにしています。幼・保・小・中懇談会や町Pネットワークといった特徴的な会合も絶好の機会です。雲仙普賢岳噴火災害から懸命に復興を果たしてきた地域の合言葉は「深江の底力」です。

若手教員研修の社会貢献活動としても貴重な場となっています。保護者や地域とどれだけ深く関わる事ができるかは、極めて大切な資質です。

終わりに

学校が少しでも地域活性化の要の役割を果たせるように、地道な取り組みを継続させていきます。生徒たちが感謝の気持ちを忘れず、いずれは「ふるさと深江」に貢献する大人になってほしいと願います。

地域ので生徒が輝く

他校でも実践されているように、地域行事には単に参加するだけでは

わたしの教育実践

凡事を徹底する



長崎市立桜町小学校 大川 伸生

当たり前のことを当たり前に行う。ここでいう「当たり前」とは、小学生であろうと、大人であろうと関係なくできることをいいます。この当たり前を続けていくこと、「凡事徹底」を私は普段の指導から心がけています。

その中の一つが「はきものをそろえる」ことです。現在私が担任をする2年生の学級の靴箱は、玄関から入ってすぐの目立つところにあり、来客が来たときにはすぐ目につく場所です。「はきものをそろえると心もそろおう」ということは、自分が子どももの時にも教わったことがあります。指導をしています。これがなかなかうまくいきません。一人につき2段ある棚をうまく使えない、揃えて

置くことができない、左右すら揃っていないものもある……。「心もそろおう」ことを実感させることはできるのかと考えもしました。指導したことが子どもたちの心にすぐに響かないことはよくあるとはいえず、少し心が折れそうになりました。

しかし根気強く指導を繰り返すことで、少しずつ改善は見られるものです。他の学級の先生からも褒めの言葉をいただくことも増えてきました。

ある時、学校便りで我がクラスの取り組みを紹介していただきました。これには子どもたちも、担任である私も大喜び。頑張って取り組んでいることは、必ず誰かが見てくださっているのだと、みんなで実感をすることができました。あれからクラスの靴箱が乱れていることはほとんどなくなりました。全校でも1、2を争うほど整然としていてと自負しています。

一度指導をしたからといってすぐに子どもたちの生活が改まるわけ

はありません。「何度も何度も繰り返して指導を続け、できた時にみんな

で認め合う」これが私の「凡事徹底」です。

子どもと共に



松浦市立今福小学校 森 崎 沙 耶

教員になってもうすぐ1年が経ちます。この1年間で大切にしてきたことは、「子どもと共に」ということです。

4月当初は、一日の流れをなかなかつかむことができず、子どもたちに教えてもらうことが多かったです。朝の会の進め方や宿題の提出方法、給食の準備の仕方など、一つ一つ子どもたちと確認しながら一日を過ごしていました。また、先輩の先生方の学級経営や授業を見せていただいで、とにかく真似をする日々が続いていました。

2学期になると、少しずつ自分の中にゆとりができて、どんな学級にしたいのが明確になってきました。真似をする日々を少しずつ卒業して、目の前の子どもたちに何ができるの

かを考えるようになりました。そこで、私が実践したことは、今まで以上に子どもといる時間を増やすことと、一人一人の良さを目に見える形で評価することです。休み時間に毎日子どもたちと遊ぶことで、子どもとの会話がぐんぐん増え、一人一人が見えるようになりました。また、一人一人の良さを発表し合い、カードにシールを貼っていくことで、良いことをしようとする子どもがどんどん増えていきました。

ただひたすらに一日を過ごしていた1学期に比べて、2学期は私も子どもたちも落ちついて生活できるようになりました。毎週、子どもたち一人一人の記録をとっています。やはり、1学期と比べると全員が成長しているのが分かります。私一人だけで突っ走るのではなく、子どもたちと二人三脚で駆けてきたからこそ、少しだけ成長を実感できるのだと思います。初心を忘れず、これからは子どもと共に成長できる教師でありたいと思います。

生徒理解の重要性



諫早市立有喜中学校 中島 康一

私が日頃から取り組んでいる教育実践についてお話しするのは大変恐縮ですが、少しばかりお伝えします。

私は毎日生徒との挨拶や会話を大切にしています。特に今年度は3年生担任として、それぞれの進路希望を把握し、的確に助言・指導していかなくてはなりません。そのためには一人ひとりの生徒の気持ちや考えを捉える必要があります。

私の一日は生活ノートの日記に返事を書くことから始まります。生徒たちはその日にあった出来事や受験への悩み、時には観たテレビの感想や恋愛話など思い思いに書いてきます。私はそれを読むことがとても楽しみです。私はそれを返します。昼休みにはそのノートを返却するのですが、生徒たちが私の返事をじっと読んでいる姿も楽しみの一つです。

その他にも授業間の休み時間や昼休みはできるだけ教室で過ごし、生徒同士の会話を聞いて、聞いて、「今、生徒は何に関心があり、どんな交友関係で、どんな悩みをもっているのだろうか？」と考えています。そうすることで、それぞれの生徒の性格や気持ちに添った声かけができるのではないかと思っています。

毎日生徒の表情や会話を見ていると、ちょっとした変化にも気付くものです。私もその変化を捉え早期に声をかけて解決に生かすことができたと経験があります。時に私に冗談めいて話しかけてくる生徒、真剣に勉強について質問してくる生徒、笑顔で私の話に戻事を返す生徒など、本当に一人として同じ生徒はいないのだと感じます。

教員生活も15年を過ぎ、これまで私が行ってきた教育実践は日々反省と改善を繰り返して、今にいたっています。これからは「生徒との会話や交流を第一に！」を大切にして生徒理解に努力していきたいと思っています。

自己肯定感を育む



志岐市立勝本中学校 山下 裕里

教員になって15年が経とうとしています。

諫早で生まれて、諫早で育った私が志岐で教鞭をとっている毎日は刺激的であり、教員をしていなかったら出会うはずのなかったであろう生徒たちとの出会いに、奇跡を感じずにはいられません。

私が生徒と接する中で、一番大切に思っていることは、生徒の自己肯定感を育むことです。自己肯定感とは人が生きていくための土台となる大切な感覚であり、その自己肯定感が学習意欲につながり、さらには人間関係を形成していくことにもつながっていくと考えています。残念ながら今の中学生は、自己肯定感が低く、私が担任している学級でも自分に自信が持てない生徒がいます。だから生徒の頑張りや成長をしっかりと

「認める」「褒める」言葉を数多くかけることが大切だと感じています。内容は様々ですが、その好機をしっかりと生かさなければならぬし、アプローチも様々です。担任である私から直接褒める場合、または毎日書いてある生活ノートの中で褒める場合、他の先生が褒めていたことを伝える場合、学級内で特別活動や学級活動を通して互いの頑張りや保護者の方に頑張りを知ってもらおう場合など、チャンスはたくさんあります。だからこそ日々の学校生活の中で個々の良さを生かせる環境づくりを行うこと、一人または仲間と共に一つのことをやり遂げる習慣や意欲を身に付け、成就感を感じる体験をさせることをいつも心がけています。

生徒は何か一つの自信をきっかけに私たちの想像を超える成長を見せてくれます。だからこそもうすぐ卒業する生徒たちがこの先、しっかりと人生を歩んでいけるように本気で「褒める」「認める」ことを続けていこうと思っています。

おたつこやだより

古稀を過ぎている

東京都世田谷区 水上 義博

(昭和42年卒)



大田区立矢口小学校を振り出しに世田谷区、三宅島、田無市(現西東京市)、三鷹市の2区、2市、1村の学校や教育委員会でお世話になり、今日に至っています。

退職後は、世田谷区退職校長会の会報部に所属し、お手伝いをさせていただいています。

40年近かった現職時代は、何事も仕事中心でしたので、人間関係も限られていました。近くに住む保育園児の孫娘の世話や犬の散歩で過ごす日が続きました。そこで、数年前から世田谷区教職員退職者互助会「おなが」囲碁の会に入会して、月1回

の大会を楽しんでいます。また、地域の地区会館で開催されている囲碁の会にも参加させていただき、棋力の向上とともに親睦を深めることを目指しています。

還暦や古稀を過ぎ回顧の思いが強まり、中学校時代のクラス会や東京玉園同窓会等に今年も出席させていただきますました。

中学校時代のクラス会は、卒業以来50数年振り顔と名前が結びつくだろうかなど不安で一杯でしたが、集合場所で顔を合わせた瞬間に不安は吹っ飛びました。その翌日は、車2台を出してくれ、阿蘇や日田、英彦山などを一日かけて案内してくれました。旧友の思いやりや優しさに触れ、温かい心で帰ってきました。

東京玉園同窓会には、10数年振りの出席でした。諸先輩の当時の学校や教育の様子や今も変わらぬ教育への情熱溢れる話など有意義な時間でした。

人々との出会いには、必ず学びがあり、自己の豊かさにつながります。今後とも人のつながりを広め、強め自分を高めるよう努めます。

第二の故郷長崎を想う

福岡県大野城市 井上 茂雄

(昭和54年卒)



27年3月に小学校を退職し、福岡市の区役所に再雇用で勤務するようになりました。生涯学習推進課において人権教育推進員という職をいただき励んでいます。

学校から区役所へと違う畑にいき戸惑うことも多くありましたが、業務内容が人権推進ということもあり、学校在職中での人権教育の実践や研修が、今の仕事に大変生きています。

学校へ出向き、PTAの委員さん対象に研修をしたり、地域の公民館で幅広い年代の方々に人権尊重のお話をさせていただいたりして啓発活動をしています。

学校を退職してしまうと、さみしさが漂ってきそうですが、この職をいただいたおかげで、私のお話をたくさんの方々に聞いていただき、自

分にとって大きなやりがいとなっています。

大学卒業からすでに40年近く経過しましたが、これまでに何度か長崎へ行く機会がありました。在職中は修学旅行の引率、学校での研究会やプライベートでの旅行など、行くことが多くありました。

長崎を訪れるたびに変貌した街の様子に驚いたり、逆に昔とちつとも変らない部分に安心したりもし、昔を懐かしみながら街の様子を楽しんでいます。

また、福岡地区では年に一度の恒例行事として長大出身の教職員同窓会を実施しています。学生時代の懐かしい話や情報交換などで盛り上がり、名簿にはかなりの人数が登録されており、それだけ長大出身者が福岡の学校現場で活躍されていることを非常にうれしく、また心強く思います。

大学時代に身につけていただいた知識や技能を今の職場で存分に発揮しながら、これからも人権教育の推進に尽力していきたいと思っています。

母校だより

日弁公 誌

教育学部・大学院 教育学研究科の動向

長崎大学教育学部長 藤木 卓



立大、文系見直しを「ニーズ踏まえ
廃止・転換も」の新聞の見出しに震
撼させられました。これは、第三期
の中期目標・中期計画の策定にあた
り、文部科学大臣から国立大学へ出
された、国立大学法人の組織及び業
務全般の見直しに関する通知でした。
その抜粋を、次に示します。

(一)「ミッションの再定義」を踏ま
えた組織の見直し
「ミッションの再定義」で明らかに
された各大学の強み・特色・社会的役
割を踏まえた速やかな組織改革に努め
ることとする。

特に教員養成系学部・大学院、人文
社会科学系学部・大学院については、
18歳人口の減少や人材需要、教育研究
水準の確保、国立大学としての役割等
を踏まえた組織見直し計画を策定し、
組織の廃止や社会的要請の高い分野へ
の転換に積極的に取り組むよう努める
こととする。

※平成27年6月8日「国立大学法人
等の組織及び業務全般の見直しにつ
いて(通知)」より抜粋

ここで教員養成系学部・大学院に

求められている組織の見直しは、主
に教員免許取得を卒業要件としない
課程(いわゆる新課程)の廃止と、
大学院修士課程の教職大学院への移
行でした。幸いにも長崎大学教育学
部では、平成20年度に既に新課程を
廃止しています。また、大学院教育
学研究科についても、平成20年度に
全国の第一陣として教職大学院を設
置しましたし、平成26年度からは修
士課程を廃止して教職大学院へ一元
化しました。その意味では、長崎大
学の教員養成系学部・大学院は組織
の見直しを終わっていると言えます。
しかし、長崎県をはじめ九州各県の
教員需要は、団塊の世代の大量退職
に伴い現在は増加傾向にあります。こ
やがて減少傾向に転じることが明白
です。現に大都市圏の教員需要は
ピークを過ぎて減少傾向にあります。
そのことを考えると、文部科学大臣
通知を真摯に受け止め、10年後の長
崎大学教育学部・大学院教育学研究
科の発展のために、できる準備を今
から始める必要があることに気付き
ます。一つは教員就職率で評価され
る出口の問題で、もう一つは志願倍
率で評価される入口の問題です。学
部部分の教員就職率は、平成26年度
に文部科学省から指摘を受けて改善

を進めており、その年度の卒業生の
教員就職率は全国平均に並ぶ程度に
回復しました。しかし、ミッション
の再定義に記した長崎県内教員での
卒業生占有率の数値目標を達成し、
その上で全国でも上位の教員就職率
に到達できなければ、先行きには大
きな不安が生じます。平成27年6月
に開催された長崎大学の経営協議会
では、教員就職率が全国平均程度で
あれば学生定員の見直しや教員養成
以外のニーズの高い分野への振り分
けの検討が必要なのではないかとい
う厳しい意見が相次ぎました。ミッ
ションの再定義を達成することを主
眼として策定した第三期の中期目
標・中期計画に沿って、先を見据え
た更なる改革へ踏み出しています。
また、教職大学院の教員就職率は全
国平均が9割を超えており、本研究
科は更なる努力が求められています。
入口の部分では、高等学校への教
職の魅力説明会を開催したり、高大
連携出前授業で教育学部の特徴をア
ピールしています。離島教育推薦枠
での募集もスタートしましたので、
志願倍率の向上を期待しているとこ
ろです。また、教職大学院について
は定員を満たすことができず、
今後、県教委等と検討を積み上げ、

年度の終わりにあたりまして、定
年でご退職される先生方及び、定年
前ではありましたがご退職され転出
される先生を、お知らせいたします。
なお、敬称は略させていただきます。

【ご退職】
小原達朗(人間発達)、石部邦昭
(人間発達)、井口均(幼稚園教育)、
福井昭史(音楽専攻)

【ご転出】木村彰孝(技術専攻)

第三期中期目標・中期計画の策定
の大詰めを迎えた昨年の6月、「国

学部での教員の養成から採用、そして研修までの学び続ける教員を育てる視点での検討が必要とされています。

長崎大学教育学部・大学院教育学研究科は、改革の嵐にもまれながらも、生き残りをかけて邁進しております。今後ともご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

感謝の気持ちで一杯

人間発達講座（幼稚園教育コース）

教授 井口 均



昭和59年4月、長崎大水害の翌年に赴任し、既に31年が過ぎました。教育学部の旧・現教職員諸氏のおかげであり、感謝の気持ちで一杯です。この間、教育学研究科・学部は、幾度かの改革を断行し、今また大き

な転換期を迎えています。厳しい状況ですが、長大教育学部の新たなアイデンティティ確立をめざして欲しい。在任中の後半は、幼稚園教諭及び保育士養成にかかわり、学部内組織づくりと保育者養成コースの存在理由を社会的にアピールする活動に多くを費やしてきました。その課題をある程度達成できたと考えています。

振り返れば研究・教育の重要性を痛感します。何かと仕事を自分で持ち込み、コースや専攻の若手スタッフとの研究・教育面での交流の機会をつぶし、学生にも手抜き講義をすること度々で、反省と後悔にさいなまれています。とは言いつつも、心を病むこともなく職を全うできました。それをどう考えるべきか、それがまた悩みです。ここ5、6年はニュージージラントの幼児教育「テ・ファアリキ」に魅力を感じ、前附属幼稚園長（現朝日小学校 校長）の元田美智子先生と意気投合し、附幼の保育実践に導入しました。「テ・ファアリキ」を紹介して下さった、福島大学人文社会学群人間発達文化学類教授大宮勇雄先生を3年連続で附幼保育実践研究会に招いて学ばせて頂き、日本の幼児教育がもつ質の

よい保育実践と共通する実践的視点を再発見できました。

長崎赴任直後、実父、父親代わりとも言える2人の恩師を失い、悲嘆にくれた時期もありました。長崎では共同保育園を一緒につくった友人・仲間にも恵まれ、子どもが通った地域の剣道場の保護者とも飲み会を重ね続け、年に1、2度の訪問やメールをくれる卒業生もいて、大変幸せなことだと改めて感謝している次第です。

最初で最後の職場

人間発達講座

教育実践総合センター

教授 小原 達朗



1977（昭和52）年、26歳で長崎大学教育学部の講師として赴任して以来、39年間この学部で教育・研

究に携わってきました。おそらく大学教員で同じ大学・学部へ赴任し、退職する例はまれではないかと思えます。それだけに長崎大学教育学部は、我が子のような存在になっています。

この間、275名のゼミ生と共に学び、教員養成に努めてきたつもりです。卒業生のうち210名が、いずれかの自治体で何らかの形で教員となつています。校長・教頭職にあつて学校のリーダーとして子どもたちの成長を支え、先生方を励ましていた教員は、正確ではありませんが15名ほどいるのではないかと思います。

保健体育専攻の生理学担当の教員として赴任しましたが、若手教員として体育実技ではサッカー、バスケット、水泳を担当し、佐伯先生のご退職後には器械運動も担当しました。水泳は、川棚の大崎海岸での臨海実習で25年間、4キロメートルの遠泳に参加してきました。平成15年からは保健体育の授業を担当しながら教育実践総合センターの専任教員を勤めることになりました。このことで履くことになりました。このことでは、保健体育専攻に対してご迷惑をおかけし、専攻の戦力を削いだので

はないかと心苦しく思っております。教育実践総合センターの担当となり、センターの機能上、教職関係の講義「教職の理解」や教科でない科目の「ボランティア論」を担当するようになりました。

平成18年からは教員採用試験対策「教採特講」を立ち上げ、平成19年から「蓄積型体験学習」という新たな教育実習を推進してまいりました。教職大学院の開始にあたり専攻主任として仕事ができただのもいい経験でした。とても充実した39年間。ありがとうございました。

教育の今と想ひいじゆ

芸術表現講座（音楽教育）

教授 福井 昭史



教育学部に赴任したのは、3%の消費税が導入された平成元年でした。

当時の学部は大学院設置という課題はあるものの、物心両面で余裕を持って教育や研究に取り組んでいたように感じました。その後、情報文化教育課程、教職大学院の新設など様々な改革があり、法人化以後は大学全体がすっかり様変わりしてしまつたように感じます。世の中全体の変化のせいでしょうか。そんな中でも毎年多くの皆さんが大学から巣立ち、教職をはじめ様々な場面で活躍されていることは喜ばしいことです。子ども達との演奏会など学生の皆さんとの取り組みが人生の役に立っていてくれれば幸いです。

東京での中学校勤務を含め40年余り音楽教育と関わってきましたが、その間に教育課程が4回改訂されました。その度に方向性が大きく変化し、「生きる力」「ゆとり」「学力重視」などのキーワードのもと、教育の内容や方法、評価などが見直され、その影響は社会全体に及んでいるようです。

戦後目覚ましい発展を遂げたと言われる音楽教育にも課題がないわけではありません。授業で上手に歌ったり楽器を演奏したりできればよいのか、楽しければよいのか、授業を通して音楽の力が本当に身に付いて

いるのかなど、再考の時期に来ているといえます。

芭蕉の俳諧用語に「不易流行」という言葉があります。基本的なもの、不変なもの、変わってはならないものと、その時々に見える新しいものと、その両方が、また、それらのバランスが大切であることを言っていると思います。近年の教育界は流行に振り回されていないでしょうか。学部や大学院で学ぶ様々な物事の本質や基本を見失わないでほしいものです。



ありがとう

玉園同窓会

玉園同窓会の

みなさま



長崎市立西町小学校

地区懇話会

長崎地区懇話会の概要

事務局長 濱崎嘉一郎

本会の主事業の一つであります地区懇話会も、12回を迎えました。

本年度は、松元浩一副学部長をお迎えして、長崎地区で開催しました。

○日時 平成27年12月5日(土)

○場所 セントヒル長崎

○参加者 副学部長1名 現職会員13名 退職会員9名 計

23名

○懇話会

初めに、長崎地区長の青嶋秋男校



長から初めの言葉がありました。

次に、本会の山崎滋夫会長から、開催の挨拶がありました。同窓会の取り組んでいる各事業、特に「ホームページの開設」など、同窓会の現状について話がありました。

その後、松元副学部長から、「教育学部の現状について」と題して、講話がありました。平成26年度の卒業生の進路・平成27年度の就職状況・今後の教員採用見込み・教育学部の教員採用支援活動等、教育学部が一丸となって、積極的に活動に取り組んでいる現状を知ることができました。中では、玉園同窓会と連携して取り組んでいる教職アドバイザ―事業や教職採用二次対策事業について、感謝の意が述べられました。最後に、長崎市立野母崎小中一貫青潮学園の山田圭二校長より、「自主性・創造性に富み、心身共にたくましく、人間性豊かな実践力のある児童生徒の育成」と題して、実践発表がありました。

行政指導ではなく、地元での選択であること、5校を1校にする勇氣ある選択であること、この町をもう一度光り輝かせたいという町の人の思いから設立された学園であること。そして、学力の向上・心力の向上・体力の向上を目指して、「つなぐこと」「そろえること」「あえて違えること」を経営の基盤にすえ、情熱的に取り組んでいる姿を見ることができ

きました。

○懇親会

退職会員・現職会員が共に学生時代に戻り、青春時代を懐かしみながら、地域の教育を盛り上げようと語り合うことができました。

先輩・後輩の絆を深め、確かなものにするとともに、各地区の教育振興に寄与していることを強く感じるひとときでした。

地区懇話会に参加して

長崎市立畝刈小学校

吉田由美子



ることが紹介された。

次に、教育学部の現状等について、松元副学部長から御講話があった。大学改革が行われる中、地域密着型の大学として力強く前進されていること、今後の教育課題を解決すべく、確かな力を身に付けた教職員を送り出そうと努力され、就職状況において成果を上げられていることが分かること共に、その御苦労も伝わってきた。

最後に、長崎市立野母崎小中一貫青潮学園、山田圭二校長から実践発表があった。地域の思いや時代の要請に応じた小中一貫校の理念や目標に基づき、小中学校職員が一つのチームとなり教育活動を積み上げていく様子と、その中で生き生きと学び、成長していく子どもたちの姿が紹介され、大変感銘を受けた。

このように、大学との情報交換を行ったり、諸先輩の貴重なお話を直に伺ったりする中で、本会の果たす役割の重要性に気付くことができた。特に、現役を引退されてもなお教育に携わって、後輩を育てていこうとされる先輩方の思いに触れ、その有難さを痛感する。同時に、次は私たちがこの絆を、後輩である現職の先生方や学生の皆さんに引き継がなければならぬとの思いを強くした。

平成27年12月5日、セントヒル長崎において、長崎地区懇話会・懇親会が開催された。長崎大学教育学部、松元浩一副学部長をお招きすると共に、山崎滋夫会長を始めとし、現役、OBの会員20名が参加した。開会に当たっての会長挨拶では、本同窓会が平成26年3月から一般社団法人となり、公益を目的とする事業として、学校図書購入や子ども自然体験への補助などが実施されてい

図書購入費助成の募集

一般社団法人長崎大学玉園同窓会は、長崎県内をはじめとする教育振興に寄与することを目的として活動を行っています。

そこで、その目的を達成するための事業として、「長崎県公立の小学校・中学校、高等学校・特別支援学校、私立の小学校・中学校・高等学校」を対象に、図書購入費の助成を行っています。本年度も下記の要領で募集を行う予定です。

- | | | |
|---------|---|----|
| 1 助成校 | 小学校 | 3校 |
| | 中学校 | 2校 |
| | 高校 | 1校 |
| | 特別支援学校 | 1校 |
| 2 助成金額 | 1校につき10万円程度 | |
| 3 募集期間 | 平成28年3月7日(月)～5月31日(火) | |
| 4 応募先 | 長崎大学玉園同窓会
〒850-0029 長崎市八百屋町36番地
(長崎県教育会館内)
電話 095-824-5494 | |
| 5 応募手続き | ①応募希望の学校は、電話で、長崎大学玉園同窓会へ連絡する
②応募した学校へ「募集要項」を送付する
③学校は、希望図書名・出版社名・冊数等を記入して応募する
④選考後決定通知を応募した学校に通知する | |

FAX 095182415494

長崎県教育会館内

長崎市八百屋町36番地

送り先 〒85010029

送ります。

窓会のあり方等について見直したり、

広報誌「たまぞの」に掲載したいと考

えています。

皆様の声をお聞かせください。

いただいたご意見をもとに、玉園同

窓会の皆様のお気づき・ご意見、ま

た教育課題や日頃の思いなど、会員の

お聞かせください。

皆様の声をお聞かせください。

お聞かせください。

お聞かせください。

お聞かせください。

お聞かせください。

お聞かせください。

お聞かせください。

お聞かせください。

お聞かせください。

お聞かせください。

お聞かせください。

お聞かせください。

お聞かせください。

お聞かせください。

お聞かせください。

お聞かせください。

お聞かせください。

お聞かせください。

お聞かせください。

お聞かせください。

お聞かせください。

お聞かせください。

ホームページを開設しました

本同窓会は、一般社団法人として、その活動状況や、特に公益目的事業について会員の理解をはかることはもとより、それ以外のより多くの人々に知っていただくことが必要になってまいりました。こうしたことから、このたび理事会・総会の議決を得てホームページを開設いたしました。

今後の本同窓会の運営にあたって、大いに活かし新たな同窓会活動をめざしてまいりたいと思いますので皆様のご活用をお願いいたします。

ホームページアドレス

<https://www.edu.nagasaki-u.ac.jp/ja/tamazono/>

メールアドレス nu-tamazono@mxb.cncm.ne.jp

一 事 一 務 一 局 一 よ り

会費納入のお願い

玉園同窓会の事業展開の財源であります活動資金に困窮を極めている現状です。特に一般会員の方で、学校に勤務している会員以外の、県内・県外在住の方々の納入が滞っている現状です。この現状をご理解いただき、会費の納入を是非お願いいたします。

○会費 一人年額 1,000円
尚、会費を2年間滞納した場合は、会員名簿から削除されますので、ご承知おきください。(会報「たまぞの」131号参照)

ともに 終身会員として

今年3月、御勇退される同窓会員の皆様、永きにわたる長崎県教育界への御尽力、本当に御苦労様でした。本同窓会では、退職後も終身会員として、本会の進展に寄与していただけたらと願っています。

是非、入会のほどよろしくお願いたします。

(1) 入会金 5,000円(終身にわたって、会報を送付します)

(2) 振込用紙は、事務局へ連絡してください。すぐお届けいたします。

死亡届・転居届のお願い

事業や活動を展開していくためには、会員の把握が基礎資料になります。転居されたり、お亡くなりになりましたら、ご多用のことと思いますが、早めに連絡くださいますようお願いいたします。